

第17回山のトイレを考えるフォーラム開催にあたって

山のトイレを考える会 代表 岩村 和彦

平成28年度を迎え、皆さまにおかれましてはいかがお過ごしでありましょうか。普段より当会の活動に対しまして一方ならぬご支援、ご協力を頂いていますことに改めて深く感謝を申し上げます。

当会を設立したのが平成12年ですから、今年で活動も17年目に入りました。正直に言えば、ここまで長く活動するとは設立時の会員の誰もが思ってもいないことでした。まあ、10年も活動すれば会の目的はほぼ達せられだろうと少々安易に考えていたものです。

山の環境がここ十数年で劇的に変わったかと言えば、それに対して賛成の手をあげる人は僅かでしょう。ことゴミに関して言えば投棄は驚くほど減っています。札幌近郊で人気にある山、空沼岳の登山道でいま、ゴミを発見することは極めて稀な出来事です。大雪山や日高山脈でもそれは同じで、実に喜ばしい傾向になっているのを実感します。

一方で春先に竹の子など山菜目的で入山者が殺到するニセコ連山や積丹岳などは目を覆いたくなる状況です。入山者のほとんどが個人であり、マナーに対する認識の欠如に対しては、山のトイレ問題からは少々離れるものの、当会も含めて何らかの手立ての必要性を感じています。放置されたトイレ紙は以前より確実に減っているとはいえ、こちらも解決には遠い状態です。

さて昨年の当会の活動は「美瑛富士トイレ管理連絡会」（以下連絡会）の設立と、その後それにまつわる活動に重点が置かれました。北海道の各山岳団体、山岳ガイド協会、当会で連絡会を設立し、当番制で美瑛富士避難小屋に設置した携帯トイレブースの維持管理をひとシーズン行って参りました。詳細は資料集にあります。維持管理自体は各団体の絶大なるご協力のもとで無事終えることができました。

ところで、この一連の活動の持つ一番の意味はなんでしょうか。北海道の山を趣味や仕事場とする関係者自らが連絡会を作り、すべて手弁当で携帯トイレブースの維持管理を行い、山の環境改善を図るという点にあると考えます。国立公園という領域上、もちろんそれには環境省抜きではことが運びませんし、登山口を抱える各町村との連携も欠かせません。使用済の携帯トイレの回収、処分までできて初めて一連の作業は終わるからです。

おそらくは全国的に見てもあまり例のない取り組みを連絡会として始めている意義は極めて大きいと言えるでしょう。美瑛富士という山域に限った活動ですが、今後これが他の山域や、全国でのモデルケースになれば幸いです。

今年のフォーラムテーマを「美瑛富士トイレ管理二年目の課題」としました。試行二年目に入るにあたって、実際に維持管理に携わった連絡会の方はもとより、ご来場の皆さまと忌憚のない意見交換をすることで、課題解決への糸口をつかむことができれば幸いです。